

Z会東大進学教室

難関国公立大国語／難関大国語 T

京大国語／難関大国語 T (京大)

一橋大国語／難関大国語 T (一橋大)



## 【問題】(演習)

出典：森鷗外『洋学の盛衰を論ず』／京都大学 前期日程 94年

## 文章略解

日本に洋学が伝来した初期には、その技術的な部分を受容するのみで、哲学・宗教の受容には及ばなかったが、次第にそうした精神的な部分に及ぶようになり、全盛時代を迎えた。しかしその後、日本国内で学問が発展したことにより、西洋文化の本質を知らないままに安易に軽視する傾向が知識人の間に生じた。学者たちのこうした自信過剰、うぬぼれによって洋学不要論が説得力を持ちはじめ、日本における洋学は衰退の危機に瀕している。

## 解答

問1 西洋文化の長所は、単なる表面的な技術という些末なものだけではない、ということ。〔39字〕

問2 大学卒業者の語学力が低下したり、来日する外国人教師が減少したり、西洋に留学する意義が喪失したとする洋行無用論が知識人の間に起こったりしていること。〔73字〕

問3 自分なりの定見を持って西洋に留学すること自体は悪くないが、それに拘泥しすぎると、たとえその自らの定見が西洋に比べて劣っていても西洋の文化を本質的に学びとろうとはせず、結局は技術的な参考として表面的に摂取するだけになってしまうことになるから。〔120字〕

問4 日本の学者たちが洋学から独立した定見を得たという点に関しては一応肯定しながらも、その定見が確かな根拠に基づくものではなく、西洋文化の本質的理解を欠いたまま洋学の衰退に加担した点では実質的な価値は低く、単なるうぬぼれにすぎないと評価している。〔120字〕

問5 日本における洋学の受容は、初めは技術面のみであったが、次第に哲学・宗教などの精神面に及び、全盛時代を迎えた。しかしその後、国内の学問の発展により、西洋文化の本質を知らないままに安易に軽視する知識人が増加した。知識人たちのこうした自信過剰に基づく洋学不要論が説得力を持ち、洋学は衰退の危機に瀕している。〔130字〕

出典：清沢満之『精神主義と物質的文明』／オリジナル問題

文章略解

人間は生まれつき物質的生活水準において異なる境遇を余儀なくされている。しかし真理を求める主観的作用が完全に達成されれば、客観的事象には貴賤のないことがわかり、どんな境遇にも満足できる。精神主義は境遇の違いによらず活動できるものだから、物質的文明における客観的事象の進歩・退歩には何の関係もない。精神主義は、現実における競争や贅沢の弊害を避けるために、物質的文明上の万物を等価値に見る認識の根源である。

解答

問1 尊貴      問2 (才)      問3 如何なく獲得す      問4 満足      問5 E・G・L      問6 (才)

問7 (a) 〓 ついしょう      (b) 〓 らんしょう      (c) 〓 あに      (d) 〓 ひつきよう      (e) 〓 ひたすら

問8 (1) 〓 羨望      (2) 〓 奢侈      (3) 〓 遍在      (4) 〓 傾注      (5) 〓 弊

問9 人間は生まれつき物質的生活水準において異なる境遇を余儀なくされている。しかし真理を求める主観的作用が完全に達成されれば、客観的事象には貴賤のないことがわかり、どんな境遇にも満足できる。精神主義は境遇の違いによらず活動できるものだから、物質的文明における客観的事象の進歩・退歩には何の関係もない。精神主義は、現実における競争や贅沢の弊害を避けるために、物質的文明上の万物を等価値に見る認識の根源である。〔200字・解答例〕



問1 傍線部を含む段落では、全体が二つのものを対比する形で説き進められている。これを整理すると、「玉杯象箸、高楼に宴安」しつつ「軽車肥馬、堂々として国事に奔走する」生き方と、「簞食瓢飲、陋巷に潜居」しつつ「赤脚草鞋、役々として家業に労働する」生き方とを対比し、前者に対して「盛大」・「尊」・「貴」・「羨望」と言った表現が用いられ、後者に対して「陋小」・「卑」・「賤」・「厭斥」といった表現が見られる。前者に対する四語の内容を設問条件にあるように「二字」で述べたものを選ぶ。続く段落で「尊」・「貴」を連続させた熟語が用いられているのでこれを探ればよい。なおこの段落では「反対の見地」を説明しているが、「見地」が「反対」なだけで語義については変化していない。そう見ないと「反対の見地」の説明にならないはずである。

問2 前の段落の最後に、「精神主義は、之に対して一段の見解を捧げんとするものなり。今少しく之を開陳せん」とあり、「精神主義は」**B**に対して、此の如き消極主義を宣揚するにあらざるなり」というのだから、空欄は前の段落から抜き出した部分の「之」に対応している。この指示内容を求めると、「是れ一方には競争相奪の根源にして、一方には奢侈贅沢の濫觴なり」という部分がそれにあたる。以上を踏まえて選択肢を見ていく。

(ア)は並列された二つのうち片方にしか言及していない点で不適切。「競争相奪」と「奢侈贅沢」の両方をカヴァーするものとしては(オ)の「物質的文明」をとるのがベスト。なお、文章後半で「精神主義」の適用の対象として「客観的事象」の語がくり返し使われているが、いま見たとおり、空欄部に近いところに構文的に明確に対応する部分が見られる点と、第七段落に「彼の客観事業の進歩、特に物質的文明の進歩」とあって筆者は客観的事象の中でも物質的文明を問題にしていることがわかる点とから、「客観的事象」より「物質的文明」を探るほうがより妥当性が高いと考える。

問3 このような抜き書き問題では、設問と傍線部分を見比べることによって、抜き出すべき解答の条件を絞っていくといい。傍線部分にある「せざるべからず」は「しないわけにはいかない・どうしてもそうする」の意を示す二重否定(＝肯定の強調)である。次の文に「而して此問題を解釈せんとせば」とあるので、これに続く部分が「どのようにするのか」という設問に対する一応の解答と考えられるが、ここには空欄が設置されていて字数が数えられず、また「具体的に」という設問条件に対しても十分な箇所にはならない。

この問題を解くポイントは、次の段落の働きを捉えることにある。すなわち、次の段落の冒頭に「然れば則ち、精神主義は如何に活動して、彼の問題を解釈せんとするか」、また段落末尾に「是れ即ち、精神主義の客観的事象に対する活動の概観なり」とあることから、この段落が「解釈」の仕方の説明になっていることが明らかである。したがって解答はこの段落中にあるはずである。この段落は「乃ち・而して・果して・是に於てか」などの表現で、論理展開が順を追って進められていることが読み取れるので、段落末尾近くから制限字数を参考に具体的な表現を抜き出せばよい。

問4 問3に関連して、空欄Dの前後は傍線部Cに対する一応の答えとなっている点をまず確認する。ここをみると、空欄はその前に

ある「現在の境遇」を解釈するにあたって「発得せざるべからざる」「見地」であることがわかる（この内容についての具体的説明は、前問の解説参照）。したがって、空欄がこの言葉に関連した表現であることは明らかである。前問で抜き出した箇所には「発見・獲得」の語が見られ、これは空欄に続く「発得」と対応する表現である。したがって、「発見・獲得」の対象を二字で指摘すればよいことになる。そうすると「無限・妙致・充分・満足」などが候補として挙がる。これらのうち、この部分の前に「不満を感じず」という表現が繰り返されている点から見て、筆者の考えの中心にあるのは「不満を感じないこと」であると判断し、さらには文章冒頭の一文に「其（＝精神主義の）第一義は、充分の満足を精神内に求め得べきことを信ずるにあり」とある点も参考にして、「満足」を採る。

問5 EとHを含む文を見ると、要するに「EはFに依存するから、GのためにHが必要だ」と言っている。したがってEとG、FとHがそれぞれ同じものになることがわかる。Iは「而して」（現代語で言うなら「そして」の意）という言葉に導かれており、この文は前文で問題にしたことをそのまま受けてさらに深く発展させようとしている。前文でより根本的なものと考えられているのはF・Hのほうなので、IはF・Hに等しいことになる。また、同じ文で「**I** 的真理の自覚」は「精神主義に外なら」ないと述べており、さらにこれを根拠として「**J** 的作用」の完成を導いているので、IとJも等しい。さらにKは続く表現がJの後と同じなので、ここまででF・H・I・J・Kの五つが同じものであると判断できる。このうちIに注目すると「精神主義」がヒントになっていることがわかるが、「精神主義」とは前問で「現在の境遇に満足を見出すこと」であることがわかっている。これは「客観」的な行為というより、「主観」的な作用である。したがって、F・H・I・J・Kの五つに「主観」が入り、

これと対立するEとGに「客観」が入ることになる。最後のLについては、このあとにくり返し出てくる「客観的事象」という表現に注目し、文中に「主観的事象」という用語が一度も見られないことも考慮して、「客観」でよい。

**問6** 設問文には数字も「最も」などの表現も見られないので、正解となる選択肢の数は限定できない。一つ一つ丁寧に見てゆくことになる。

(ア)について。文章冒頭の二つの生き方を対比した部分で、「国の大事のために奔走して働く」方は、「宝玉の盃や象牙の箸を用いて、大きな建物の中で宴を楽しみ、軽やかな車をよく肥えた馬にひかせて、堂々と国の大事のためにかけまわる」という生活だから、「盛大」という形容から見ても、これが「豪勢」だというのは問題ない。ただし、筆者の主張の趣旨からして、選択肢中の「もとより当然」が不適である。

(イ)について。筆者は人の生存の仕方の違いについて「生れて各異なる家庭にあり、各異なる身心を以て、各異なる経験を受」けることと、「世相の変転」とを挙げているが、「その人の努力」についてはふれていない。

(ウ)について。文語的文章において「吾人」というのは、自分個人を示すのではなく、「われわれ・われら」を意味する。これを知らなくとも、この文中で「吾人」という言葉が用いられるときは、複数の人間についての表現であるか、ないしは現状でなく「しなくてはならない」という理想を示した表現となっていることに注目すれば、筆者個人の現状に関する表現ではないことが判る。また、「吾人」という言葉を用いていなくとも、筆者が自分個人の生活にふれている記述は問題文中に見られない。

(エ)について。問題文中に「彼の陋巷は決して陋小なるにあらず、之を陋小なりとする我心が陋小なるを信じ、彼の赤脚草鞋は決して卑賤なるにあらず、之を卑賤なりとする我心が卑賤なるを知るなり」とあるのに相当した選択肢だが、この部分を現代語に要約すると、「物事はそれ自体が卑賤陋小のではなく、そうだと考える自分の気持ちこそがそうだと思っただけである」ということである。つまり、筆者の考えに従えば、物事を客観的に卑賤陋小だと断定することはできないのである。これに対して選択肢においては、後半部分は問題ないが、前半部分「であるかどうか」の部分が結果的に断定されるかどうかと違っており、強すぎる。

(オ)について。問題文第七段落の表現に適合する。

問7

読みだけでなく、意味も各自辞書で確認されたい。(a)は「ついしょう・ついじゅう」と二つの読みがあり、ニュアンスが異なる。(d)は漢文では一字ずつでも副詞や動詞として用いられ、どちらも同様に「ついに」・「おはる」と訓読する。

問8

いずれも入試ではよく問われる字である。(3)は「偏在」との混同に注意すること。

問9

「要約」とは原文の論理展開を保存したまま原文を相似的に縮小したものである。これに対して「要旨・趣旨」は原文の中心となる主張・見解を末尾におくという文章整理を施しながら、他の文章内容で説明を加えるものである。したがって、この両者は本来は異なるべきものである。しかし、大学入試においては多く字数制限がなされることもあって、いわゆる「要約問題」においては、厳密な区別はつけられない。

この文章においては、末尾の第七・第八の二つの段落にわたって筆者自身が要約を行っているので、これを活かしながら、設問の指示どおりに「精神主義と物質的文明との関係」に明確にふれられればよい。この文章で言う「物質的文明」とは、文章前半の対比的説明に注目すれば、生活水準の相違を中心とした「客観的事象」の総合されたものであると考えられる。「物質的文明の進歩・退歩にかかわらず、どんなところにも精神主義は活動の地歩を占めることができる」という点で、精神主義と客観的事象は無関係である」というのが第七段落の趣旨であり、客観的事象の総合が物質的文明なのだから、精神主義は物質的文明の進歩退歩とも無関係であるということになる。そしてその説明として、第八段落では「客観的事象のすべてを等価値に見るという認識の仕方」を主宰するものが精神主義であり、このような精神主義の活動は、競争相奪・奢侈贅沢の弊害を救うための必須条件である」と述べている。これらを中心として、字数にゆとりのあるかぎり、このような主張の前提を説明してやればよい。前提としては、第六段落に論理的に順を追って説明された内容を整理したものを答案の前半に置けばよい。さらに、文章の最末尾で述べられた「競争相奪・奢侈贅沢の弊害を救う」必要がある理由、すなわち現実の生活水準という境遇の相違によって人々が苦しめられていることにもふれておくとよい。



## 【問題】(演習)

出典…高見順『わが胸の底のここには』／京都大学 06年

## 文章略解

母と祖母の手に育てられた「私」は、十三歳で中学に入学する。「私」は教科書を購入しようと神田へ出かけて古本屋の存在を知り、節約のためというより親孝行のつもりで新本より安い古本の教科書を購入してしまう。ところが、本が傷んでいる上、書き込みも多いので「私」は後悔するようになる。そんなある日のこと、漢文教科書の書き込みを見咎めた教師に厳しく注意されてしまう。誤解はすくなく解けるが「私」はかえって深く傷つく。

## 解答

問1 古本屋の前に群を成して詰めかけている中学生たちを見て、自分も古本を買うことで新本との差額分を節約し、母親への孝行をしようかという思い切った考えが浮かび、また自分のその勇気を正当化する根拠を得たこと。〔99字〕

問2 主人公には、古本を思い切って買った自身の勇氣と親孝行の喜びを貫き通す性格の強さがないので、前の持ち主の名前を消した墨の跡を見るたびに、どうしても古本を買ってしまったという自身の行為への後悔の気持ちがよくさまされたから。〔109字〕

問3 単に古本を買うことで教科書代が節約できた喜びでなく、母親の経済的負担を軽減し、親孝行ができたことに対する崇高な精神的満足感。〔62字〕

問4 漢文の教科書に勉強の妨げになるような余計な書き込みをせつせと行い、主人公の目から見ても明らかに無知で常識はずれな学力の劣る人物であるという意味。〔72字〕

問5 教科書への書き込みを注意した教師は、主人公の所有する教科書が古本であることに気づいて、家庭の経済的事情から古本を購入せざるを得なかったのであろうと内心同情し、書き込みを注意した自身の行為を後悔し、とりつくるおうとしたので、主人公は、自分で古本にすることを決断した勇氣や、親孝行しようと考えた事実までが、教師の勘違いによってないがしろにされひどく傷つけられた気がしたということ。〔188字〕

出典：幸田文『月の塵』〈あとひき桜〉「下手な天ぶら」／筑波大学 00年

文章略解

「私」は他人から「きちんとしている」と誤解されてきた。元はと言えば「私」の中身の乏しさを慮った親がしつけた家庭教育のことを下手な文章に書いたことによるのだが、それがまるで下手の天ぶらの厚い衣のように「私」を息苦しくさせていた。そんな折、孫が無心に「私」のだらしない暮らしぶりを指摘してくれ、その衣を壊してくれた。これを機会に「私」は、自分のありのままの姿に見合った老後の生活を新たに作ろうと思っている。

解答

問1 「私」の暮らしぶりについての孫の無心な発言が、折り目正しい暮らしをしている人であると他人から思われている誤解を解き、化けの皮をはがしてくれるということ。〔76字〕

問2 「私」の中身の乏しさに触れないままに、親から受けた家庭のしつけを文章に書いたことから、読者たちから折り目正しい人であるとの多大な誤解を招いてきたこと。〔75字〕

問3 「私」は他人から買いかぶられる状態を疎ましく思いつつも有効な打開策が見出せずにいたところへ、折良く「私」の実像を無心に指摘する孫が登場し、誤解を解くのに好都合だったから。〔85字〕

問4 孫によってそれまでの自分につきまとっていた虚像を壊す契機ができたことを喜ぶとともに、次第に老いていく自分に見合った今後の生活を新たに作っていききたいと思っている。〔80字〕



## 問1

まず、傍線部(1)直後の一文「もちろん当人は自分の言ったりしたりすることが、おばあさんを壊しているなどとはつゆ知らないのだが」や「壊されている私は湧きあがってくる微笑をおさえかねて、まことに上機嫌になる。」がヒントになる。

『壊されて、なぜ嬉しいのか?』——その謎への関心が、読者を引っ張っていく。第二段落から第五段落までに『私が孫に壊されること』の例が並んでいる。例を並べるところから、少しずつ読者を謎の解明へと導いていく構成である。

第二、第三段落が一つの例である。末尾の「今日は寝巻着ていないの? といったような形で、誰の前でもかけかまいのない披露をしてくれる。」の部分に着目してほしい。二つ目の例は第四段落だが、ここでも末尾は「…散らかすの好き? と。後日も発表してくれる。」と締めくくられる。第五段落は、例のアラカルトといった風だが、ここでも「それらのことは、時にふれ折にふれごく自然に人にも伝える。」と締めくくられている。

これらの例で作者の言わんとするところは、畢竟『孫が、普段の自分のありのままの姿を世間に暴露する』ということに尽きる。このことが、なぜ『孫が私を壊す』ことに繋がるのか? 論理的中間項を埋めれば、『私』とは、『私の世間体』ということになるだろう。正確には、『孫が、私の「世間体」を壊す』となるべきである。

このことは、第十一段落で次のように述べられていることからもうかがえる。「…うまく孫なのである。無心に私の衣を壊してかかる。…思わずほっとして、新鮮な空気を吸う思いがする。ありのままにいられるということ、さわやかである。」——言うまでもなく「壊されている私は湧きあがってくる微笑をおさえかねて、まことに上機嫌になる。」という第一段落の叙述と「思わずほっとして、新鮮な空気を吸う思いがする。ありのままにいられる」ということは、さわやかである。」の箇所とは呼応する。「もちろん当人は自分の言ったりしたりすることが、おばあさんを壊しているなどとはつゆ知らないのだが」の部分は、ここでは「無心に」という一言で述べられている。すなわち、第一段落で提示された謎が、この第十一段落で最終的に解きあかされる、という構成なのである。

では、『私の「世間体」』＝私の衣』とはどのようなものか? これが、第六～第八段落で提示されている。つまりところそれは、傍線部(2)でも問われているところの「下手がこしらえた天ぶらのような、コロモ」なのだが、これについては、問2の項で解説しよう。

問2 傍線部(2)は、「ような」の語に見られるように、もちろん比喩である。直後の文章で、「から」で受けられる原因説明の箇所を挟みつつ、この比喩が次のように説明されている。「…から、人の誤解をまねき、あたかも私はきびしいしつけのもとに行儀正しく、言葉づかい行き届き家事一切おしゃれに至るまで、きつちりきちんと、乱れることのないくらしぶりかの如く、思い違えられているふしがある。」

『コロモ』衣』という点に着目すると、第八段落の「間違えられてしばしば私は、いかにもちゃんと折り目正しく暮しているように、時に敬遠され時にほめられ、厚い衣の下で汗をかく。」や、第九段落末文の一節「きちんとしている、という買いかぶられる衣」なども手掛かりとして浮上してくる。

問3 傍線部(3)直前の「泣きごと嫌だし衣つきのままも辛いという時に」がポイントになる。「衣つきのままも辛い」は、第九段落を受けている。末尾の「きちんとしている、という買いかぶられる衣は、もうやりきれなくなつた。」と直接対応する。これを第十段落冒頭の「だが」で受け、「そうになると、中身をさらすにも時期というものがあると心づいた。時期を失えば本当のことをいつたつて、泣きごとにしかならないのである。」と述べる。この段落が、先の「泣きごと嫌だし」に繋がってくる。すなわち、第九段落冒頭にあるとおり、「一度ついた衣は、いつでも破れる、という簡単なわけにはいかななくなつた。」なのである。「…(そんな)時にうまく孫なのである。無心に私の衣を壊してかかる。」という文脈から考えよう。

問4 問1の解説後半で述べた通り、第一段落で提示された謎が第十一段落で解き明かされて締めくくられる。第十二段落で新たに提示された話題、それが亡父の言として示される。亡き父の発言の眼目には「本来はまず、つくることを一先先に考えておくべきものだ」にある。これを受けての傍線部(4)なのだから、そのポイントは「ありのまま、壊す、つくる」にある。世間に、ありのままの自分のイメージを作っていく。そのために、「下手天の衣」を壊していく、という趣旨の宣言である。



【問題】(演習)

出典…三浦哲郎『まばたき』 / センター追試験・99年

解答

問1 (ア) ④ (イ) ② (ウ) ⑤

問2 ④ 問3 ③ 問4 ①

問5 ⑤ 問6 ④

出典：幸田文『終焉』／ オリジナル問題

文章略解

全体を貫いているのは、父と娘（主人公）との葛藤である。エピソードの上からは、前半（A）と後半（B）とに分かれる。まず前半は、空襲の危機が迫り、伊東へ父を迎えに行った時のこと。ここも、前後に分けて読む。

(A)

娘Ⅱ「生」と「死」というものについて、真剣に考えたことがない。ふつう人は、生きていくかぎり、その生きている状態が「常態」であるため、それを当たり前のこととしてしまう。そうして、日々の生活の「日常性」なるものにひきずられる。他者の死に際しても、その他者の死を、葬式などにより「日常性」の中に取りこまれたものとして受け止め、対処する。あるいは、その「ある他者」の存在の、自分の日常からの喪失、というレベルにとどまる。つまり、恐怖とともに、「生」と「死」そのものに向き合うことを忌避するのだ。叔母の勧めどおりに父を迎えにくる主人公の姿は、こうした、「日常性」なる外的なものにひきずられているあり方だ。彼女においては、「生」と「死」とは、対立概念にすぎない。

父Ⅱ「生」と「死」に関する自分なりの洞察と覚悟とをもち、それに基づいて主体的に「生き」そして「死のう」と考えている。運命的な自分の生と死とを、主体的に受容しようとしている。彼においては、「生」と「死」とが強い相関関係で結ばれている。「生」と「死」というものについて真剣に考えたことがないにもかかわらず、こうした自分の「生死への決意」に干渉してくる娘。父が怒っているのは、それに対してだ。

前半の後の部分では、父の「電撃的な言葉」によって、娘のあり方が変わってくる。

娘Ⅱ「日常」という社会的惰性にすぎない、抽象的な「空襲による死」ということが、父の「電撃的なことば」によって、脳裏に具體的なものとしてイメージされる。そこから、父を思う娘の情が、本当に腹の底から呼び覚まされる。それは、社会的惰性としての観念ではなく、「個」としての自分の存在そのものからわき上がるものであった。その故に、父の「決意」と立派にバランスをとる。ことができた。この見事な対峙が、この小説の迫真性の源泉である。

(B)

娘Ⅱこの後半も、前後に分かれる。最初は、現実の空襲に際して、父を思う感情にひきずられて、愚行を展開する。空襲の危機に対して何の役にも立たず、無意味であるにもかかわらず、父を押し入れにかくまう。気休めにすぎない。これは、「日常性」にひきずられた愚行だ。やがて、父への口答えから腹が据わる。「死のうとどうなろうと、とにかく父のそばにいる。」これは、父を思う娘の、「個」としての実存からくる決意だ。もはや、「日常性」に侵されてはいない。ここでまた父の「決意」との対峙が可能になり、迫真性を生んでいる。

父Ⅱ前半から続く、自己の生死への覚悟と決意とは、変わっていない。最初は、前半同様これに干渉して邪魔する娘の愚行に本気で怒っている。やがてそこに、娘を思う「父としての情」が加わる。彼が嫌悪するのは、人の行動を浸食する、「日常」なる、外的社会的な惰性である。彼が尊重するのは、自分という「個」としての存在に即した、真の主体性である。実存である。したがって、外的社会的な観念に侵されない、純粹な「親子の情」「父娘の情」も、一方では尊重する。この尊重を踏まえた上での、人間の力を越えた運命的なもの、「死」の受容への決意である。そこが理解できないと、彼の「決意」の重みもわからないことになる。

#### 作者解説

作者の父幸田露伴は、第一回の文化勲章受賞者。明治二〇年代、写実主義の尾崎紅葉、理想主義の幸田露伴と、並び称せられる形で紅葉時代を築く。

明治維新後、欧化の風潮の中で停滞していた文芸だが、伝統復活の機運と共に、前時代の西鶴の見直しが行われた。紅葉・露伴は、そうした時流の推進者として登場してくる。

代表作『五重塔』『二口剣』『風流伝』等は、彼の理想主義・精神主義を如実に示す。職人として一芸に打ち込む姿を、心理的に追求していかうとする。もとより、単なる西鶴の二番煎じではない。西鶴の示した日本的リアリズムの可能性を、明治という時代の中でどのように発展させるか。これが、紅葉追隨時代の大きな課題の一つであった。

また、処女作ともいえる『露伴々』は、国際色豊かなスケールの大きなロマンであり、スリラー『対髑髏』等を収めた『葉末集』や『幻談』『竜姿蛇姿』は、伝奇物語集である。さらに『頼朝』『為朝』『平将門』『蒲生氏郷』『運命』など、日中の史伝物にも傑作を残す。幸田露伴自身は、明治三〇年代末から始まる、自然主義と高踏派の葛藤という、日本近代文学の文壇から離れていく。が、そうした日

本近代文学形成過程で捨てさられた様々な可能性を、彼の文学は体現していた。

付け加えると、彼の博識は相当なもので、批評、注釈、翻訳等、その活躍は恐ろしく多岐に渡り、著作の量も膨大である。

作者文は、露伴の次女。父の死後、父に関わる随筆を書くことから執筆を始めた。平安時代から始まる日本の日記随筆文学の伝統を現代に受け継ぐ点で、父とはまた別の意味で、日本の近代文学が捨ててきてしまった可能性の一端を教えてくれる。『父—その死—』『こんなこと』『木』など、珠玉の随筆集もさることながら、『おとうと』『きもの』『流れる』『闘』など、小説も、名作でありながら所謂「純文学」の範疇におさまらない。名作であることを支えているのは、その魂のこもった独特の文体と、鋭い観察眼である。父の史伝も、正確にして豊富な学識に基づきながら、彼自身の思想が濃厚に投影されてかなりデフォルメされているが、彼女の随筆も、正確な写真というより、彼女の感性や思想が昇華された形で構築されている。きまったストーリーを追うのではなく、エピソードを積み重ね、円環をとじるようにして組み立てられる構成は、父の影響なのだろうか。

**解答**

問1 (ア) ① (イ) ② (ウ) ③

問2 ① 問3 ①

問4 ④ 問5 ①

問6 ③

**解説**

問1 (ア) 『迎合』とは、「自分の考えをまげても、他人の意に従って気に入られるようにすること。(岩波国語辞典)」。『追従』は、ここでは「ついしよう」と読んで欲しい。「へつらうこと。おべっかをつかうこと。(岩波国語辞典)」。「ついじゅう」と読めば、「人の言う事、した事などにそのまま従うこと。それに習ってまねてばかりいること。」。『迎合』との関わりで、ここでは前者。前後

の「しらけきって」「無意味なことばと笑顔」などもヒントにする。

(イ)『はからずも知った』と『子の不覚さ』とに分けて考える。まず前者だが、『はからずも』は、「おもいがけないことに。(岩波国語辞典)」。つまり、予想だにしていなかった、ということだ。「突然」「突如」や「偶然」「結果的に」といった問題ではない。後者は、ここでの主語が「父」であることに留意する。父からみたところの、『子』≡作者である。①「自分」では、父自身になってしまう。③⑤では、主語が作者であるかのよう。『不覚』の意味は、「しつかり覚悟ができていないこと。特に、油断して、し損ずること。／思わず知らず、そうなること。(岩波国語辞典)」。④「愛情の乏しさ」というような意味はない。

(ウ)「電光石火」という言葉があるが、ここでは素早さの意味だけではない。電気(あるいは雷)による攻撃を受けた感でイメージしてほしい。「稲妻(≡雷)のように凄まじい勢いで敵を攻撃すること。／電流を受けた時に感ずる衝撃。(岩波国語辞典)」とある。「私を刺した。」「反射的に胸に描いた猛火の図にぞっとし」「私はへこたれきった。」などもヒントにする。

問2 「疝かんに触る」ではなく『疝を煽る』となっている点に注目してほしい。ただでさえ疝かんに触っているところに、それをいっそう募らせるのだ。

まず「来意を聴いて機嫌は曇ってしまった。」で、疝かんに触っていることが説明される。来意とは、「ひとまず帰京を促しては」「迎えに行った。」という箇所箇所で書かれている。①前半がこれにあたる。

続いてこれを煽っているのが、主語の「これ」だが、この指示語は、直前の前提条件「同行の親類の女人はしらけきって迎合追従的な無意味なことばと笑顔を向けたが」を受ける。①後半がこれにあたる。

- ② 主人公は、べつに「偽って」いない。
- ③ 自分の楽しみを邪魔された、というような子供っぽい理由は、テーマと結びつかない。
- ④ 『煽る』が説明されていない。直前の指示語と条件節を見落としてはいけない。
- ⑤ 「親類の女人」が、「この問題とは無関係な第三者」であるとは、書かれていない。

問3 父が「あんなに話してくれた」というその時の、主人公の心理。これを考える。「……畳みかけ畳みかけ、長い時間をしゃべった。」までが、父が「あんなに話してくれた」ということ。それに続く主人公の心理が「はじめ私は恐れて堅くなり、やがてただ



その大河の勢をもって語られるところに全く吞まれ尽して、いたしようも無かった。いつか話は又もとに戻され、電撃的なことばは私を刺した。……反射的に胸に描いた猛火の図にぞっとし、『そんなのいや、もうやめて』と歎願し」「私はへこたれなかった。」などで描かれている。

ここは、父の説く理性的な道理、理屈と、主人公の、父を思う情との対比がテーマ。「大河の勢をもって語られるところに全く吞まれ尽して」しまった主人公は圧倒されて感情的になり、父の「電撃的なことば」の呼び起こした「猛火の図」のイメージがこれを助長する。父の説く道理などは、感情がふきとばしてしまうわけだ。

① 「当惑の底に浮いて来たものはただひたすらに、おとうさんと呼ぶ子の情であった。」以降は、傍線部Bから後の事態であるかに見える。「何一つ覚えていない↓当惑↓おとうさんと呼ぶ子の情」の順であるかに見える。しかし、主人公に衝撃を与えた父の「電撃的なことば」は、「このわたし（＝父）の身体が道端で膨らみあがって爛れ死んでいたら」である。この言葉が主人公にとって電撃的となるのは、娘として父を思う感情故である。父の理屈を「何一つ覚えていない」ことと、「ただひたすらに、おとうさんと呼ぶ子の情」とは、表裏一体である。

② 「怒り」が言い過ぎだが、「言葉を理解する理性を失ってしまった」がもつと言い過ぎ。

③ 父の学識の量と、主人公の理解力の程度がテーマなのではない。

④ 基本的に選択肢の比喩はよくない。④の「電撃的な言葉に刺され」は比喩であるうえ、「茫然自失するまでに」が言い過ぎで、そこまでは書かれていない。

⑤ 父の、他者の情に対する無理解がテーマなのではない。父への批判がテーマではないということ。

#### 問4

父と娘の葛藤がテーマである。父は「来ること（＝死）はそのままに、すかつかと受取って滞らない」（37行目）姿勢でいる。そのことを、娘は「よくわかってる。が、」（37行目）「空襲下に端座する父を平然と見ていられない」（53行目）。「今この際に古筵一枚でも庇いにしたい」（54行目）。あとは消去法。

① 「父にまで指図する」ということが問題なのではない。

② 「年寄りの父を敬おうともせず」ということが問題なのではない。

③ 「卑怯にも自分一人で逃げる気だ」などと「誤解」していることをうかがわせる叙述はない。

⑤ 娘は「死の恐怖に怯え、我を失って狼狽」しているわけではなく、父の身を案じている。「不安と恐怖でこらえられず」は、この後。

### 問5

「ど、どっというような音響が起り、あたりは揺れた。」(56行目) この空襲のはじまりにあたって、主人公は「不安と恐怖でこらえられず、『おとうさん』と呼んだ。(中略) 張りつめた神経は自ら支えることを失って」というように、我を失い狼狽する。しかし、そんな精神状態で無我夢中に叫んだ「このさなかにおとうさんのそばは離れられない、どこへ行くのもいやです、行きたかありません。」という言葉が、却って主人公の行動の指針を定める。腹が『ずんと据わる』のだ。

② 父に刃向かうように、行動の方向性が定まったわけではない。

③ 「父の怒り」に「我を失っていた」わけではなく、また腹が据わることと、冷静な思考とは、ちよつと違う。

④ 「動けなく」なったのではない。

⑤ それまでも、父の指図に従ってなどいない。

### 問6

父を思う娘の情と、死を泰然と受け入れようとする父の理性の葛藤は、ここに至って、父の内面の葛藤にもなってくる。「おとうさんは文子の死ぬのを見ていられますか。」という娘の問いかけに対し、「父の顔は、ちよつと崩れて」が、娘に対する父としての情を示し、「かまわん、それだけのことさ。」という返答が、その情に打ち克つ意志と理性とを表す。一方「文子のこのおとうさんを思う心はどうしますか。」という問いに対しては、「それでいいのだ。」「悲しいにはじめからきまつてる。」と答える。ここでは、情を肯定している。情の存在、その貴重さの肯定を前提とした上での、自他の「死」の受容である。「情とは別のものだわ」という発言は、そういうことだ。「いつも愛情というものをあんなに悦びとうとぶ人」(53～54行目) という叙述も、これを裏付ける。

① 「売り言葉に買い言葉」という次元の喧嘩ではない。

② 主人公を「愛していない」のではない。

③ 前半がF、後半がE。

④ これを答えた人は、テーマから考える、ということができていない。

⑤ これでは、Fが説明できない。

●  
×  
モ  
●

## 【添削課題】

出典：夏目漱石『現代日本の開化』／一橋大学 00年

## 解答

人間はできるかぎり労力を節約したい、自由気ままに時を過ごしたいという願望を抱く。そこから開化という不思議な現象が現れた。文明開化は人間の生活を楽にし、幸福にするはずであった。しかし、実際には生存競争からくる不安に苛まれ、生活に適応する努力に追われている。物質面における充足感が得られ、生命の存続そのものの問題は乗り越えても、心理的には開化以前の昔の人間にくらべてかえって苦痛が増しているのではないか。(200字)

## 解答

人間が対象を理解するとき、事物の微細性や不透明性による限界があるが、自己の心理は理解可能だから、自己以外の対象も心あるものとして擬人化する。現代人は科学的観察による機械論的理解方式の全能性を信じて擬人的理解の適用範囲を心的世界に限るが、未開人は感性に基づいて森羅万象を擬人化する。擬人的理解方式は対象の種類を問わず可能だから、現代人が未開人の理解方式を否定するのは誤りで、二つの理解方式は両立しうる。〔20字〕

## 解説

「要旨」のまとめ方の基本については本科Ⅰ期や夏期講習の教材でも折にふれ説明してきたが、本科Ⅱ期から参加の諸君もあるだろうから、あらためて簡単に振り返っておこう。その手順はおよそ次のようなものだった。

- (1) 文章構造(意味段落構造)の把握
- (2) 結論段落の位置の認識(頭括型・尾括型・双括型のどれか)
- (3) 各意味段落の内容の確認
- (4) 結論文の作成(双括型は尾括型に再編成)
- (5) 残る文字数(結論文以外に使える字数)の確認・結論段落以外の各意味段落への配分
- (6) 答案の書き下ろし

これを通じて、《筆者の主張》を、《その根拠との因果関係》を軸としてまとめたものが、「要旨」となる。

さて、右の手順に従って、問題文の内容を確認しよう。

まずは、各形式段落のキー・センテンス(トピック・センテンス)に注目して、いいかえれば例示や譲歩の部分を切り捨てること

で、形式段落ごとの主題を抽出する。

〈第1段落〉 現代の科学的知識なしには、人間は対象を理解するのに限度がある。

〈第2段落〉 その理由のひとつは、細部の観察が不可能だということである。

〈第3段落〉 もうひとつの理由は、不透明な対象の内部の観察が不可能だということである。

〈第4段落〉 自分の心やその動きだけは、対象の微細性や不透明性による理解の限界がない。

〈第5段落〉 他人の心は不透明だから、人間は他人を自分に擬して理解する。

〈第6段落〉 擬人的理解は、対象の種類がどうあろうと、基本的性格を変えない。

〈第7段落〉 この理解方式は現代人・未開人に共通であり、違いは適用範囲の広さだけである。

〈第8段落〉 その範囲の違いは、現代人が事物の細部や不透明な内部を徹底的に理解可能だと信じることに起因する。

〈第9段落〉 いっぽう未開人は事物の細部や不透明な内部の観察が不可能だから、あらゆるものを擬人的に理解する。

〈第10段落〉 現代人が未開人の理解方式を誤りとするのは不当である。なぜなら森羅万象を心あるものとして理解することは現代科

学にも照らしても可能だからである。現代人の理解方式（科学的理解・機械論的理解）と未開人の理解方式（感性的理解・擬人的理解）とは定義と感覚あるいは意味の違いであり、両者は両立しうる。

次に、各形式段落の話題の共通性に着目しながら、右の内容を《意味段落》にまとめよう。このとき、入試現代評論は原則として「ポストモダンの立場からの、『西欧近代』という思考様式に対する批判」という視点から書かれることを念頭に置くとよい。すると、およそ次のようになるだろう。

《意味段落1》（形式段落1～5）……人間が対象を理解するときの様式

《意味段落2》（形式段落6・7）……その様式の性質

《意味段落3》（形式段落8・9）……その様式の、現代人と未開人における適用範囲の違い

《意味段落4》（形式段落10）……過度に限定的な現代的理解の不当性・理解の両様式の両立可能性

問題文は《尾括型》の構造を取っていることがわかるから、答案もおおむね右の順番に文を連ねてゆくとよいのだが、始めに述べた

ように、筆者の主張を明確に打ち出すためには、最後に書くべき結論文の内容を先に決定しておくことが時間を無駄にしないコツである。その際に、右の《意味段落2》は《意味段落4》に述べられる筆者の主張の根拠となる内容を含むことに注目しよう。そうすると、答案の中では右の《意味段落2》と《意味段落3》は順序を入れ換えたほうが論理構造がすっきりする。解答では《意味段落2》を《意味段落4》に対する因果関係を示す順接確定条件の形で表現して両者を一文にまとめたが、もちろんこの両者は順接の接続詞を使って二文に分割しても構わない。

なお、右に挙げた「『西欧近代』に対する批判」について補足しておこう。

問題文では「西欧近代」の問題点につながるものとして「現代の科学的知識」を取り上げている。入試現代評論において、「現代」という言葉は二つの様相を持つ。ひとつは「近代」を時代遅れの発想と見ること・ポストモダン」であり、もうひとつは「依然として『近代』の延長として捉えられる現在」である。

筆者は「現代自然科学のみを過信する視点」を批判するのだから、筆者のいう「現代人」とは「いまだに西欧近代的なパラダイムに囚われている人」程度に解釈することになる。

L3T/L3TK/L3TF  
難関国公立大言語／難関大言語 T  
京大言語／難関大言語 T (京大)  
一橋大言語／難関大言語 T (一橋大)



会員番号	
------	--

氏名	
----	--